

8/4
福井

磯崎補佐官発言を撤回

辞任 否定 公明は統投容認

参院特別委

磯崎陽輔首相補佐官は3日、参院平和安全法制特別委員会に参考人として出席し、安全保障関連法案をめぐる「法的安定性は関係ない」とした自身の発言を撤回し、陳謝した。「今後も首相補佐官としての職務に精励していく所存だ」と辞任を否定した。発言に不快感を示していた公明党は補佐官統投を容認した。野党は引き続き辞任を要求。4日に安倍晋三首相が出席する特別委集中審議で任命責任をたずなふと追及を繰り返さない構えだ。

(5面に表層深層)

特別委で磯崎氏は「軽率な発言により」迷惑をお掛けした。国民、与野党に心からおわびする。法的安定性は重要と認識している」と陳謝。安保法案の参院審議を「9月中旬までには終わらせたい」とした発言も「深くおわび申し上げる。首相補佐官として極め

て不適切だったと謝罪した。公明党の西田泰「参院幹事長は質疑後、国会内で記者団に「首相を補佐する自覚を持って臨んでほしい。見守ることにする」と言明した。質問した民主系の福山哲郎幹事長代理は「責任は極めて重い。職を辞すべきだ」と要求。さらに「補佐官の職に居続ける限り追及していく。

首相の責任は非常に大きい」と述べ、首相の姿勢も問う考えを明言した。野党側は特別委の理事懇談会で、質疑が不十分だったとして再度の招致を求めた。維新の党の柿沢未途幹事長は記者団に「この場を乗り切れば大丈夫だとの考え方がありありと見えた。これからは首相に矛先が向けられるだろう」との見方を示した。

首相は特別委に先立つ政府与党連絡会議で「身党に迷惑を掛け、申し訳ない。法的安定性は政府の重要な柱だ。注意識深くやっていきたい」と述べた。政策に関し首相に進言する立場である補佐官の国会招致は初めて。民主党など野党の求めに自民党は応じなかったが、最終的に特別委の渦

池田肇委員長(自民党)が実施を決めた。磯崎氏は7月26日、大分市での講演で安保法案に関し「法的安定性は関係ない。わが国を守るために必要かどうかを気にしないといけない」と述べた。法の規定や解釈がみだりに変わらぬ法的安定性を軽視した発言として批判が強まった。

8/4 福井

官邸 早期火消し奔走

安全保障関連法案をめぐる「法的安定性は関係ない」とした自らの発言に、磯崎陽輔首相補佐官は参院特別委員会、撤回し謝罪した。連立相手の公明党内で浮上した辞任論を受け、官邸が火消しに奔走。公明党も

安保法案

磯崎氏の発言取り消しを受け、振り上げたこぶしを下した形だ。国民の法案に対する懸念が深まったとする野党は、安倍晋三首相の任命責任に照準を合わせ、追及を強める構え。政府、与党の狙う問題解決はあきらめない。(一面上部記)

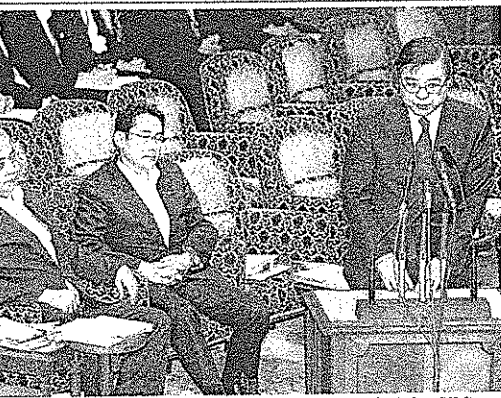
磯崎補佐官が発言撤回

野党 首相責任追及へ

表層 深層

【だめ押し】
「迷惑を掛けている」。
3日昼の政府与党連絡会議、首相は公明党幹部の参院、磯崎氏発言のわびをされた。この後開かれた参院平和と安全法制特別委員会、磯崎氏は「心からおわびする。発言を取り消す」と何度も頭を下げた。

7月26日に磯崎氏の発言があった後、官邸が收拾に向けて動き出したのは、30日朝の公明党会場で厳しい意見が相次ぎ、翌31日に井上義久幹事長が「看過できない」と批判したことがきっかけだった。「これ以上引きたら、どうなるかわからない」。公明党から官邸にだめ押しの電話も入った。官邸内にあつた「いすれ収束する」との案、議論はなくなった。



参院平和と安全法制特別委に参考人として出席し、答弁する磯崎陽輔首相補佐官(右)。奥は(左から)中谷防衛相、岸田外相=3日午後

昨年7月、集団的自衛権行使を容認した際、「法的安定性の確保」に腐心してきた公明党。磯崎氏の発言で「根柢からひっくり返され、ほらわたが煮えくりかえった」とう(一)関係者。
官邸には、米ハワイ州で続行中だった環太平洋連携協定(TPP)交渉が大筋合意す

官邸側の意向を踏まざるよつに、午後には官邸を訪れた公明党の高木陽介経済産業副大臣が首相との面会後、記者団に「はじめがついたのでないか」と区切りを付けた。別の幹部は「首相が謝った。それでよしとするしかない」と語った。

自民筋は「(一)で押し消さないで野党を公明党から挟み撃ちされかねなかった」と振り返った。
「法的安定性についてしっかりとした認識を持ってい

るとは受け止められなかった」。民主党の枝野幸男幹事長は記者団を前に、磯崎氏の陳謝について「強調した。この日の質疑で、首相が磯崎氏に電話で注意しただけだった」とも批判。枝野氏は「首相の問題意識は希薄だ。磯崎問題というより安倍問題」と、首相の責任も追及する考えを示した。
特別委で賛同に立った民主党の福山哲郎氏は「政府は法的安定性を維持しながら集団的自衛権行使を限定容認した」と強弁してきた。ちやが台返

させたいらきりがない」と首相の胸中を窺する。
磯崎氏が安保法案の策定過程に携わった中心人物だ(一)ことも背景にある。「更迭しても、法案に対する信頼性が揺らいだとして野党を勢いづかせるだけ(自民党中堅)との読みも働く。
しをしたのも偶然だと指摘。法案に対する疑問は一層強まったと訴えた。
今後、民主党は特別委のほか、衆参の予算委員会でも追及する方針だ。維新の党も首相は甘く見ている。この問題は尾を引く(一) 植沢未奈幹事長」と反発しており、攻勢はやむ気配がない。
長丁場の法案審議でこれまでも苦しい思いをしたところのある自民党幹部には不安が消えないう。後から見たら、辞めた方が良かったという事態にならないとも限らない」